

清少納言（高飛車なカリスマブロガー）と紫式部（ファンタジック腐女子）

清少納言・紫式部 はい、いとをかしー

清少納言 「清少納言でございますー」

紫式部 「む、む、紫式部ですう」

清少納言 「声が小さいし、下向きすぎでしょ、式部ちゃん」

紫式部 「ごめんなさい、基本的に人前出ず、ほぼ引きこもって書き物してばっかの生活だったもので」

清少納言 「あ、書いてたっつのはつまり紫式部ちゃんの代表作長編あれ？源氏蚩」

紫式部 「蚩じゃなくて源氏物語」

清少納言 「ごめんごめん、源氏物語だ。光源氏が活躍する」

紫式部 「そーそー、よくご存知で」

清少納言 「そりゃ超有名ですもの、リーダーは諸星くん」

紫式部 「そっちじゃねえわ。明星買ってたけど」

清少納言 「そっちじゃない方のやつも有名らしいよ、数世紀の時を越えても。知ってるよね源氏物語」

紫式部 「恐れ多くてロングヘアーうざ子です」

清少納言 「もし式部ちゃん仮に今の時代まで生きてたら、相当な額の印税入ってるよね」

紫式部 「発想が、なまめかし、よ。いやけど私なんかより清少納言ちゃんのエッセイの方がすごいって。」

清少納言 「え、そうなの!？」

紫式部 「(客に)ね、皆さん、このヒトの大人気エッセイ「枕草紙」知ってますよね？」

清少納言 「(客からの反応を受けて)あらまあ、いとをかし」

紫式部 「特に、冒頭の文なんか国語の教科書に絶対入ってて、古文の試験とかによく出てるみたいですよ」

清少納言 「あら、枕草子の冒頭」

紫式部 「春はあけぼの横綱」

清少納言 「横綱余計でしょ。春はあけぼのだけでいいのよ。」

紫式部 「そっかそっか、いとすまぬ」

清少納言 「にしても嬉しいわ、式部ちゃんと並んで人気なんて。今もしこの時代に生きてたら、いと印税生活」

紫式部 ね。平成の世では、カリスマ人気ブロガーとかいるみたいですよけど、このヒトの日記、1000年以上も前からのファンが各時代にいますからね。ですから、このヒトがもしこの平成の世まで生まれてたらね、相当なカリスマしわくちゃブロガーですよ！

清少納言 しわくちゃはいらないけど、ままま、けど人気は絶大よね」

紫式部 平安時代の、たわらまちですよ

清少納言 いやはや、いとをかし

紫式部 平安時代の、さくらももこですよ

清少納言 あらあら、いとをかし

紫式部 調子に乗るな！(と、ドツク)

清少納言 いた！何するの！

紫式部 ご、ごめんなさい、つい。別に、嫌いとかそういうわけですよ

清少納言 「あれ、今聞き捨てならぬ言葉が

紫式部 「ただね、納言ちゃんね、一言だけ言わせてもらおうと、いとをかしは、今の世にはニュアンス伝わらないと思う」

清少納言 「え？いとをかし、が伝わらない？じゃ、趣きがあって心が動いた時、みんなどう表現してるの？」

紫式部 「マジやばい」

清少納言 「え？」

紫式部 「とにかくちょっとでも心動いた時は【ヤバい】って表現するらしいんですよ」

清少納言 「いと、ヤバし？」

紫式部 「いと、じゃなくて、強調するのは、マジ」

清少納言 「マジ？」

紫式部 「春はあけぼの、マジやばい。．．と、こうなります」

清少納言 「え、それが現代風！？」

紫式部 「もっと今風に言うと、春はやっぱ、あけぼのっしょ？マジで超やばくない？．．こんなかんじですよ」

清少納言 「え～、なんかやっぱ私たちの言葉がいいなあ」

紫式部 「じゃせめて語尾あげたらみんなに伝わりやすくなりますよ

清少納言 「いとをかし～（語尾あげる）って？」

紫式部 「そそ、いとおかしくなくな～い？」

清少納言 「あれえ、バカにされてる気がするの私だけかな？」

紫式部 「いやいや、そんな馬鹿にはしてるけど、最初から」

清少納言 「やっぱそうなの！あなたの紫イモ日記にもそんな事書いてあったなーって今思い出したよ」

紫式部 「紫式部日記ね」

清少納言 「清少納言こそしたり顔にいみじうはべりけるヒト」そう書いてあったでしょ！

紫式部 チェックしてるねえぬかりないねえ．．

清少納言　その点、私の枕草子には、あなたの悪口とか一切書いてないから

紫式部　これは大変失礼しました

清少納言　一切、あなたは眼中になかったから。

紫式部　意味変わってくるやないか！（どつく）

清少納言　いたああ！

紫式部　すいません、別に嫌いとかそういうわけです

清少納言　聞いたってばそのくんだり。なんでそんなに恨まれるかな、私

紫式部　「いや、別にそんな恨みとかはないですよ。ただほら、私たち、お互い、別々の中宮に仕えてた身分だし、何かとライバル視はしてたから」

清少納言　「ま確かにお互い違う中宮だからね。（密に）あ、皆さんわかります中宮？天皇の奥さんですよ」

紫式部　天皇の奥さんっていうと皇后って言い方もありますけど、その中でも中宮ってのは正式な奥さんのこと」

清少納言　「天皇なんてのはいつの世もいっぱい奥さんはべらかしてましてね」

紫式部　「その中の一人が一条天皇」

清少納言　「でその奥さんの一人、その中宮定子（ていし）さまに仕えてたのがこの清少納言で」

紫式部　「中宮彰子（しょうし）に仕えてたのが私、紫式部でございます」

清少納言・紫式部　「もう大変だよね〜」

清少納言　「そこだけは意見が一致するねえ。貴族内じゃ権力争いがもう、ほんとうずまいでうずまいで。ぶっちゃけると、うちらが仕えてた中宮も、藤原氏からこっそり送り込まれた娘ですからね」

紫式部 「まま、藤原氏はうまいこと権力にこぼんぎめしますからね」

清少納言 「オフレコだけど策略結婚だからな！」

紫式部 「声が大きいって！（小声にさせ）滅多な事口にしちやダメですよ。後ろから刺されますよ」

清少納言 「ここじゃ藤原氏もいないでしょ」

紫式部 「いやいや、壁に耳有り、障子にメアリーって言いますから」

清少納言 「どこの外人、障子のメアリーって」

紫式部 「とにかく刺されますって。（遠くを指差し）あーいとやばし、あそこ」

清少納言 「（急にびびって）え？ど、どこ？だ、誰か見てる？」

遠くを見る際に、紫式部が刺す

紫式部 「死ねえええええ！」

清少納言 「お前が刺すんかい！」

紫式部 「うそうそ。今のは予行練習ですよ、こんな風に常に宮廷暮らしはハラハラドキドキがいっぱいでしたから」

清少納言 「まあ、そうね。だから最初の話に戻るけど、あんたよくそんな中で、あんな長い源氏物語なんて書いたよね、そこは素直に尊敬するわ」

紫式部 「これはこれは。中身みてもらえました？」

清少納言 「ぶっちゃけ三行ぐらいで読むの止めた」

紫式部 「じゃ全然内容知らないよね？」

清少納言 「内容は噂で知ってる。やりちん男があちこちやりまくる日本初のハーレムラブコメでしょ」

紫式部 「もうちょっと言い方工夫してもらえないかなあ」

清少納言「ごめん、じゃあ作家先生から直々にあらずじ教えて。それが一番伝わりやすいから。」

紫式部 「んー、ま改めて言われるとあれだけど、だから、つまりね、源氏物語ってのは、光源氏ってやりちん男性が、色んな女性とねんごろになる日本初のハーレムラブコメです」

清少納言「・・・うん」

二人 「じゃ合ってるんじゃないかねえか！（お互いどつきあうが、式部は避ける）」

清少納言「（叩かれ）いた！避けたな、そして！」

紫式部 「いとすまぬ！もうね、源氏物語を書いてた頃の精神状態やばくって、特に書き始めた頃、自分の親なくしたり、旦那もなくしたりで、なんか現実逃避的な意味で書いたってのはあったから」

清少納言「あ、そういうバックボーン？ああいう光源氏みたいな男になりたっていう欲求が潜在的にあったとか」

紫式部「いや、うちの親はね、私を男の子にさせてがってはいましたけど」

清少納言「あ、そうか、式部ちゃん女のくせに漢文も書けたんだもんね」

紫式部 「そこ言わなくていいでしょ」

清少納言「（客に）式部ちゃん頭いいんですよ。当時の教養で言うと、男性が漢文を書けるって事なんですよ。ただ女性だと逆にその教養あるとイヤミになっちゃう」

紫式部 「中宮だけは、私に漢文教えて欲しいって言ってくれたんだけどね」

清少納言「だからわざと書けないフリして、かわいい子をぶってたの」

紫式部「【かわいい子をぶってた】らなんか虐待してると思われちゃいそうだけど、ま、とにかく」

清少納言「いや、けどあれだけ恋愛長編書けるってえのはゼツタイ百戦錬磨の恋愛してたわけでしょ」

紫式部 「いやいや」

清少納言 「ぜったいアンアン意識してるわけでしょ？」

紫式部 「アンアンって？恋愛特集号？」

清少納言 「焼肉屋の」

紫式部 「そっちかよ！いや恋愛マスターは納言ちゃんでしょ」

清少納言 「いと、まさか」

紫式部 「言っとくけど、私、相当ウブだから」

清少納言 「言っとくけど、私だって、相当ウブ毛あるから」

紫式部 「ウブ毛の多さは知らんわ！」

清少納言 「恋愛経験抱負じゃなかったから書けないでしょ、あんなの」

紫式部 「いや、恋愛とか本当わからなくて、色々なヒトに色々な恋話を聞きながら書き溜めてったりもしたのよ」

清少納言 「うそお。本当にい？」

紫式部 「だいたい平安時代の恋愛事情とか結婚事情ってのはね、この平成の世の中とは全然違いますから。伝えたところで理解しにくいと思うよ」

清少納言 「うそ？そんなに違う？」

紫式部 「そりゃ時代が違えば恋の仕方もかわるって。だから例えば、うちの時代の結婚と言えば、通い婚が主流でしたでしょ？」

清少納言 「え、なに？平成の世に通い婚ってないんですか？」

紫式部 「(客に) 皆さん知りませんよ通い婚なんて？結婚って男性が女性のもとに通う、これが通い婚。男性が女性のもとに三日続けて通ってたら、もうそれである二人は結婚してるんだって事になるわけですよ」

清少納言 「え平成の世じゃそれは結婚にならないの？え、ちょっと待って。この中の殿方で、女の人のことへ三日続けて通った事あるって方、手をあげてもらえます？(と客にふる)」

客 「(あると手をあげる)」

二人 「はい、既婚者！」

清少納言「（手をあげた別の客に）あなたもあるんですか？」

二人 「はい、既婚者！」

などと既婚者の事実をどんどん作る

紫式部 「けどこの方々も平成の世じゃ既婚者にならないみたいですよ」

清少納言「え、じゃ「垣間見」って行為も知らないのかな？」

紫式部 「垣間見えるって言葉だけは残ってるみたいですけど」

清少納言「垣間見を知らない？女性の家にはね、殿方が覗き見できるぐらいの隙間あるんですよ、で、世の殿方たちは、射止めたい女性の品定めするためこのぐらいの隙間の間にじーっと」

紫式部 「じーっと挟まったりしてね」

清少納言「怖い怖い。こんな（細すぎる）細いところに隙間じーっと挟まっていたらそれはホラーよ。このぐらいの隙間から覗いて品定めするっていう」

紫式部 「これは我々の時代特有ですよ」

清少納言「あらまあそういう文化がこのご時世にはもうない？」

紫式部 「だから夜ばいっていう文化も皆さんほぼわからないと思います」

清少納言「え、夜ばいもないの！？あんな待ち遠しいドキドキする時間ないの！」

紫式部 「いや、夜ばいとか垣間見はね、一応平成の世でもあるらしいんですよ

清少納言「あ、一応あるんだ？」

紫式部 「ただ、ちょっと名称が変わりました」

清少納言「ほう、どんな名称に？」

紫式部 「ストーカーっていう横文字に」

清少納言「アメリカナイズされちゃったんだ、この国は」

紫式部 「ま、ただいつの時代もね、やっぱり女性は求められたいですよね」
清少納言「だよー、あー、求められたい。あー、恋の話とかしたから、なんか私もひさびさにそういうドキドキ味わいたくなってきた。どうしてくれるのよ、式部ちゃん」

紫式部 「別にいいじゃない恋したって」

清少納言「いや、もう私いまは無理よ。自信ないもん、エッセイしか自信ない。ちょっと触ってこのお腹」

紫式部 「（お腹さわって）わ、マジやばい。何部屋の方？」

清少納言「お相撲さんじゃねえわ。けど、まあ食べ過ぎてるのは事実だけど」
紫式部 「まあ、けど腹出てたって大丈夫よ。このぐらいの隙間の分だけ勝負すりゃ。今の子だって写メとかでこう、お腹ひっこめて、ちょうどいい角度で誤摩化して、あと修正かければ」

清少納言「修正とか写メとかよくわからないし、だって隙間の分で勝負ってたって中に入ってくるでしょ」

紫式部 「中入った時には、真っ暗にしとけばどんな容姿かわかりやしないから」

清少納言「けど灯りをぱっとつけられたりしたら相撲取りみたいなお腹見られちゃうでしょ」

紫式部 「だったらそういう時こそ、清少納言ちゃんっておきの、いとをかきなフリーズで誘惑すりゃいいじゃないの？」

清少納言「え、何よ、その、私とっておきフリーズって」

紫式部 「腹は、あけぼの」

清少納言「もうええわ！」

